

● 北 陸

響 敏 也

【芸術は人生の主食か付け合わせか】

乱世の風雲児にして怪物、ヴァレンティノー公チェーザレ・ボルジアは32歳で没した。

彼と、しばしば対照して論じられる武将、織田信長は48歳で本能寺に消える。

信長が、天下に雷名を馳せた今川義元との一戦に出陣前、謡い舞いしたと伝わる「幸若舞」の《敦盛》の一節、「人間（じんかん）五十年、化天の内を比ぶれば、夢幻の如くなり。一度生を享け滅せぬもののあるべきか。これを菩提の種と思ひ定めざらんは口惜しかりき次第ぞ」は、今昔の寿命の比較に引用されがちだが、ここで謡われる内容は別方向だ。つまり「五千歳だか八千歳の長命という化天に比べて、自分らの人生の長さなど幻さ…」なのだ。たしかにチェーザレ・ボルジアも信長も、50歳を待たずに最期を迎えた。

この感慨と、コントラストが鮮明になるのが「人生百年時代」という陽気な言葉だ。言われてみれば年末に届く喪中はがきも、近頃は暗い印象が皆無だ。93歳で永眠、97歳で、101歳で…。どれもが、昔なら大往生と称賛され羨まれる稀少事なのだ。

それでは、人生の長さの目盛りに関して、芸術の沃野で見ていくと、どうか。「芸術家に年齢はない」とも言うけれど、不死身でない限り「老い」は誰にもある。それをば涇味や円熟の境地に昇華するのか、老いを寄せ付けぬ激しい燃焼を維持する超人芸で行くか、誰もが直面せずには済まない人生の案件がある。

個人の芸術家に年齢との向き合い方があれば、その一方では恐らく、あらゆる芸術活動のなかで最も大人数が同時に同一場所と同じ再創造活動をするオーケストラ演奏の場合での、「時」との向き合い方は、どうか。

ここで注意すべきはオーケストラ演奏と指揮者の仕事とはまったく別種の作業だということ。一方は芸術家群像で、他方はたった独りの孤軍だ。しかも孤軍である指揮者は、欧州の言葉で「60歳にして初めて誕生する」とあるように普通の人類とは別種の生物だ。

オーケストラに限って考えよう。2018年に設立30周年を迎えたオーケストラ・アンサンブル金沢は、最初期の顔触れもほぼ代替わりして、小粒の颯爽とした新鋭オケから、北陸の楽都の象徴、日本を代表する中規模オケ、を自他ともに認める鮮やかな存在となっている。関西でも関東でも、何か音楽についての発言・執筆をする者なら、この北陸の総合芸術都市に常に気を配っていなければならない。それほどの存在感を身に着けている。

OEKの本拠地、石川県立音楽堂の年間稼働表を見渡しても、京浜・京阪神の諸都市の演奏会場に比して、数量的にまったく譲らぬ稼働ぶりであり、質的には凌駕する勢いさえある。この都市が駅に降り立っただけでも活気を感じさせるのはゆえなしとしない。

芸術監督就任1年目を迎えたミンコフスキは、前年にドビュッシーの《バレアスとメリザンド》演奏会上演で女人筋まで唸

らせる出来栄で前景気を煽ったが、就任後の定期では一転、ベートーヴェン、ブラームスと並べる堂々の選曲。振幅幅の大揺れ感も魅力だ。

富山の音楽拠点オーバードホールに眼を移せば、以前から盛んだった桐朋学園との共同企画がいろいろ実を結んできた。桐朋オケの取り組みも、もはや自分たちの錬磨の場であり、世界への飛翔の場と位置付けている。

数年前だったか「一度はここで聴いてみたい、世界で25の演奏会場」に日本で唯一選ばれているハーモニーホールふくい。作家の津村節子が命名した名産ミディ・トマト「越のルビー」の名を関した音楽活動は、独自の弦楽四重奏団を創設するなど、発信系の活動が鮮明だったが、昨年から地元の才能の育成路線に切り替わっている。貴重な楽才を繊細に見つけ出す工夫もあるという。期待は大。

今回は「時の遠近法」のなかで2019年という時にズームしつつ、初めの作業と、その結果でとらえてみた。